

T.S.エリオットの祖父とF.H.ブラッドリーの「絶対者」：1910-15年に焦点を当てて

古賀, 元章
福岡教育大学教授

<https://doi.org/10.15017/27324>

出版情報：Comparatio. 16, pp.40-58, 2012-12-28. 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会
バージョン：
権利関係：

T. S. エリオットの祖父と F. H. ブラッドリーの「絶対者」
—1910—15 年に焦点を当てて—

古賀元章

はじめに

T. S. Eliot (1888—1965) は、両親—父親 Henry Ware Eliot, Sr.(1843—1919)、母親 Charlotte Champe Eliot (1843—1929) —の厳格な家庭教育のもとで育てられている。彼らの教育方針の源となっているのは、エリオットの祖父 William Greenleaf Eliot (1811—87) である。キリスト教ユニテリアン派¹の牧師であった祖父は、後世に名を残すほど輝かしい社会活動に全身全霊をささげている。たとえば、教会の建設はもちろんのこと、学校、大学、救貧基金、衛生委員会の設立に助力を惜しまなかったり、生活貧者や病人のための仕事に精力的に行ったりしている (Ackroyd 16-17)。

しかしエリオットは、祖父の高い倫理感を両親から意識させられたことが人生上の足かせとなって苦悩している。その苦悩から解放されるため、エリオットは二度の行動をする。それは、1910-11 年のパリ遊学と 1914 年の海外留学である。これらの時期、彼はイギリスの観念論哲学者 F. H. Bradley (1846—1924) の完全無欠な実在である「絶対者」(the Absolute) に心を引かれる。なぜなら、この哲学概念の信奉が彼にとって、絶えず感じていた祖父の重圧を軽減することにつながると期待したからであると思われる。ところが、1915 年に海外留学先のロンドンで彼は、アメリカの詩人・批評家 Ezra Pound (1885—1972) と出会ったり、イギリス人 Vivienne Haigh-Wood (1888—1947) と結婚したりする。このような出来事が一因となり、彼はイギリスに定住して文学に専心し、「絶対者」を信じなくなる。

そこで本稿では、1910—15 年に焦点を当てて、エリオットが祖父と「絶対者」を意識しながら、人生にどのように立ち向かったのかを考察したい。

1

1910 年、これまで両親の庇護のもとにあったエリオットは、ハーバード大学大学院修士課程を修了した後、ソルボンヌ大学で勉強するため自分の意志でパリへ遊学する。詩に興味を持っていた彼にとって、その遊学の目的は、本物の詩を学ぶためであり (“What France Means to You” 94)、1910—11 年の Irving Babbitt (1865—1933) の講義を受講したためでもある (“T. S. Eliot” 102)。こうした目的には伏線が考えられる。それは、1908 年に彼がハーバード学生会館でイギリスの詩人・批評家 Arthur Symons (1865—1945) が著した *The Symbolist Movement in Literature* を発見し、そこに見られるフランス象徴主義の詩人たちの作品に強く引き付けられたことである。このような出来事がいかに画期的であったかは、この著書が全く新しい感情への手引き、つまり啓示であったという彼の発言 (“The Perfect

Critic” 5) からうかがえる。この著書の発見が引き金となって、彼は翌年の学生文芸雑誌 *Harvard Advocate* の中で、“the Americans retained to their native country by business relations or socialites or by a sense of duty—the last reason implying a real sacrifice—while their hearts are always in Europe.” (qtd. in Jain 37) と書いて、心がいつもヨーロッパにあることを肯定している。

今回のエリオットの大胆な行動は、以上だけが理由ではなく、彼が両親から受けた厳格な家庭教育と深い関係があると言える。彼らは最初、その行動に反対している。とりわけ、母親は猛反対している。なぜなら、彼女は息子に送った 1910 年 4 月 3 日付の手紙の中で、“I cannot bear to think of your being alone in Paris, the very words give me a chill.” と書いているからである (*The Letters of T. S. Eliot* 12)。

祖父が、実は、エリオット家に大きな影響を及ぼしていた。彼は、孫のエリオットが生まれた前年に死去したとはいえ、両親も逆らえないほど絶大な影響力を同家に行使していたのである。エリオットは “American Literature and the American Language” の中で、彼について次のように回想している。

The standard of conduct was that which my grandfather had set: our moral judgments, our decisions between duty and self-indulgence, were taken as if, like Moses, he had brought down the table of the Law, any deviation from which would be sinful. Not the least of these laws, which included injunctions still more than prohibitions, was the law of Public Service: it is no doubt owing to the impress of this law upon my infant mind that, like other members of family, I have felt, ever since I passed beyond my early irresponsible years, an uncomfortable and very inconvenient obligation to serve upon communities. (44)

祖父はモーセのような存在であった。死後もエリオット家を支配する彼の教え (“the law of Public Service”) は、ヘブライの立法学者の十戒のようになって、エリオットの心の中にずっと生き続けることになる。ところが彼は、祖父が信奉するユニテリアン派を厚く信仰するように育てられたにもかかわらず (“To Sister Mary James Power,” 6 Dec. 1932; qtd. in Power 126)、この宗教の外で成長したと感じ (“[A review of] *Son of Woman: The Story of D. H. Lawrence*. By Middleton Murry” 771)、この宗教を行動規範として強要する家庭環境が重圧となるのである (Powel 4)。そうした息の詰まる彼の苦しい心的状態が、上の引用文の “an uncomfortable and very inconvenient obligation” に暗示されているように思われる。また、先の *Harvard Advocate* の “a sense of duty—the last reason implying a real sacrifice” は、自分が直面する家庭教育の呪縛への批評として読み取れるであろう。

このように、エリオットがパリ遊学を決心しようとしたのは、両親による厳しい家庭教育からの解放と深く結び付いているのである。そこには、祖父の教えに反発する彼の態度がう

かがえる。この態度がパリ遊学前に書かれた詩の中でも表現されていることを調べるため、“Portrait of a Lady” (1910-11) の第二部を見てみよう。この詩全体は、大学生の青年の語りと中年の婦人の話し声から成り立っている。同部では、彼がライラックの花咲く4月に婦人を再び訪れる。この花を生けた部屋で、彼女は枝を指でひねりながら熱く人生論を語り、相手への思いやりを示そうとする。しかし、彼女との関係にこれ以上に深入りするのを警戒して、青年は次のように考える。

I take my hat: how can I make a cowardly amends
For what she has said to me?
You will see me any morning in the park
Reading the comics and the sporting page.
Particular I remark.
An English countess goes upon the stage.
A Greek was murdered at a Polish dance,
Another bank defaulter has confessed.
I keep my countenance,
I remain self-possessed
Except when a street-piano, mechanical and tired
Reiterates some worn-out common song
With the smell of hyacinths across the garden
Recalling things that other people have desired. (20)
Are these ideas right or wrong? (20)²

胸の内を吐露する婦人への非礼な対応を自覚しながらも、彼は公園で新聞の漫画やスポーツ欄を読んで心を落ち着かせようとする。彼が新聞で三つの内容の三面記事を注目する。それは、イギリスの伯爵夫人の舞台活動、ギリシャ人の舞踏での殺害、もう1人の銀行員の公金横領の告白である。最初の記事は青年が婦人をまだ意識していることを示唆し、他の二つの記事は彼が婦人に対する背信行為を意識することを示唆する。擦り切れた流行歌を繰り返す手回しオルガンは彼女を暗に指し、その楽器の機械的で飽き飽きした音は彼女からの話し声を暗に指している。こうした場面で彼の脳裏をよぎるのは、ヒアシンスの匂いと共に他人の欲望である。この花は、彼女を改めて異性の対象として彼に喚起している。

エリオットは、シモンズの *The Symbolist Movement in Literature* が紹介するフランス象徴主義の詩人たちの中で、とりわけ Jules Laforgue (1860-87) の影響を受けている。後に彼は、この詩人が “a *dédoublement* of the personality” (“A Commentary” [1933] 469) を用いていると論評している。この論評の言葉は、シモンズの著書に収められているラフォルグの “Autre complainte de Lord Pierrot” (61) の語り手ピエロの振る舞いである。彼は

親密に話しかける女性を意地悪く揶揄する。“Inconscient” (61; Laforgue 85) を気にする彼の目つきは、彼女が単に交遊の相手だけではなく、彼の自問自答の対象でもあることを物語っている。そこでこの揶揄は、愛情を寄せる女性の打ち明け話によって予想される自らの気まずい立場を回避するための彼の防御策なのである。そのため彼は、相手に対し冷淡に応答する。

ラフォルグの手法は、自分の内心を隠して別の人物の印象を表すことである。このような手法が、彼の影響のもとで書かれたエリオットの“Portrait of a Lady” (Green 23n) の青年の言動に認められる。そこには、両親の家庭教育を介して祖父の影響が認められる。祖父の *Lectures to Young Men* は、International History Library of Y. M. C. A. から全米に配布されたが、当然のことながらエリオット家にも常備されていたに違いない (Miller 15)。もしそうであるならば、同書の内容も両親の口から子供たちに語られたであろう。たとえば、同書では肉欲を抑制することが奨励されている (121-27; Miller 15)。この種の抑制とその反発との板挟みに陥っていたエリオットの心境が、真面目であるのか遊び戯れているのか即座に判別付けにくい青年の言動に反映されているであろう。加えて、エリオット家のモットーは黙して行動することであった (Charlotte Champe Eliot 358; Drew 165n)。祖父は沈着な信仰を説いていた (*Discourses on the Doctrines of Christianity* 129) ので、このような彼の信仰の姿勢が孫の自制的な言動に投影されているように思われる。

2

結果として、エリオットは快く思わない両親を説き伏せてパリへ遊学する。当地で彼は、本物の詩を学ぶという目的を十分に果たせとはいえないが、フランス語とのかかわりを深めている。たとえば、*Nouvelle revue française* を購読し、詩人・劇作家・外交官 Alan-Fournier (1868-1955) に個人的にフランス語を教わり、彼から紹介されたロシアの小説家 Fyodor Mikhailovich Dostoyevsky (1821-81) の小説 (フランス語) を読んでいる。彼はまた、同じ下宿に住んでいた医学生で、文学にも関心を示す Jean Verdenal (1890-1915) と一緒に、美術館に行ったり、最新の書物を論じ合ったりしている。こうした遊学の経験がエリオットに、この都市で落ち着いてどうにか暮らし、フランス語でものを書こうという考え (Plimton 99) を抱かせたと思われる。

しかし、エリオットの心の中が満たされない精神状態を、大学時代の友人で詩人・批評家 Conrad Aiken (1889-1973) に送った 1914 年 12 月 31 日付の手紙で読み取ることができる。そこでは、次のような内容が書き綴られている。

Just at present this is an inconvenience, for I have been going through one of those nervous sexual attacks which I suffer from when alone in a city. Why I had almost none last fall I don't know—this is the worst since Paris. I never have them in the country.... One walks about the street with one's desires, and one's refinement rises

up like a wall whenever opportunity approaches. (*Letters* 82)

エリオットはオックスフォード大学に留学した際の不便さを述べている。それは、神経症の性的衝動で、パリ以来である。ここで看過できないのは、彼が 1910-11 年の遊学先のパリでも神経症の性的衝動に見舞われながらも、品行方正のよさが壁のように立ちはだかったことである。

そこで、こうしたエリオットの心理描写がこの都市で脱稿された詩にどのように表現されているのかを見てみたい。まず “Rhapsody on a Windy Night” (1911) の場面から引用してみることにする。

Half-past one,
The street-lamp sputtered,
The street-lamp muttered,
The street-lamp said, ‘Regard that woman
Who hesitates towards you in the light of the door
Which opens on her like a grin. (24)

月光に照らされた場末の街灯がある。そばを主人公の男がとぼとぼと歩いている。午前 1 時半、街灯が突然語りかけて、彼を戸口に立つ娼婦に目を向けさせる。彼女は相手に近づこうか近づきまいか迷っている。ドアの開き具合が、歯をむき出してにやにや笑う様子にたとえられている。このような様子は、彼女がその相手を誘惑したい表情を示唆する。それは同時に、娼婦を観察した男の自分の心の動きを反映させた光景でもある。そこには、祖父が説く肉欲の抑制を教育する両親の家庭方針と、若者特有の異性への興味との間で揺れ動くエリオットの心の迷いが認められよう。

同じ頃、“Portrait of a Lady” の第一部が書かれている。同部は次のような場面で終わる。。

—Let us take the air, in a tobacco trance,
Admire the monuments,
Discuss the late events,
Corrects our watches by the public clocks.
Then sit for half an hour and drink our blocks. (19)

これは、ある年の霧と煙に覆われた 12 月の午後、男は中年の婦人を訪問する場面である。打ち解けた態度で接しようとするため、彼女は若者が関心を抱きそうな話題（若いピアニストによるショパンの音楽）を持ち出す。ところが彼は、婦人への興味と、訪問したことへの後悔の念が入り混じった複雑な気持ちを抱くようになる。その後、彼に共感を覚えさせるた

め、彼女は話し相手を持つことが生きがいであると熱っぽく語る。すると、これまで笑みを浮かべて静観していた青年の思考に次のような変化が起こる。

—Let us take the air, in a tobacco trance,
Admire the monuments,
Discuss the late events,
Corrects our watches by the public clocks.
Then sit for half an hour and drink our blocks. (19)

親密な雰囲気醸し出す婦人の話のペースに巻き込まれないようにするための手管として、彼は部屋の外の日常生活にかかわる事柄（記念碑、最近の出来事、公共の時計、僕たちの黒ビール）に頭を切り換える。祖父が *Lectures to Young Men* の中で若者の教育のために重視するのは、肉欲の抑制ばかりではなく、教養ある女性の存在の重要性 (123-25; Miller 15)、アルコール類の禁止 (94-107; Miller 15) である。青年の描写に見られるのは、冷淡な態度、異性への興味、黒ビールである。加えて、世俗的な関心もうかがわれる。これらの事柄は祖父の教えに背く内容である。したがって、上の詩行における青年の思考には、祖父の教えに基づいた両親の家庭教育への反発がエリオットの詩行に反映されているであろう。

このように、エリオットはパリ滞在中でも、祖父の偉大な存在を意識している。そこで、パリ遊学から帰国する前後の彼の意識を理解するため、その頃書かれた詩の表現内容を検討してみよう。

“The Love Song of J. Alfred Prufrock” (1910–11) の次のような最後の場面は、エリオットの帰国直前に書き上げられている。

We have lingered in the chambers of the sea
By sea-girls wreathed with seaweed red and brown
Till human voices wake us, and we drown. (17)

We” (“we”) や “us” は、主人公プルーフロックと彼の同伴者である。彼らが出かける先は、イタリアルネッサンス期の彫刻家・画家・建築家ミケランジェロ (1475–1564) を話す女性たちの部屋である。この主人公は、40歳位の男性であるし、エリオット自身でもある (“T. S. Eliot ... An Interview” 17)。当時の母親はセントルイスの「水曜クラブ」(Wednesday’s Club) という女性組織の指導的な立場にあり、会合でミケランジェロが持ち出された (Holt 11-12)。そうすると、彼女は自宅でも娘たちと一緒にこのイタリアの偉人を話題にしたと察せられる。主人公の名前や部屋を取り巻く煙霧がエリオットの子供時代から借用されている点³を考えると、彼の同伴者はその頃の詩人を指すであろう。大学時代の友人 W. G. Tinckom-Fernandez は、エリオットがパリへ遊学する前に彼の家の別荘を訪問したとき、物静かなたたずまいの

家族団らんを目撃している (81)。後にエリオットは、この別荘から見渡す漁港の景色に感激している (“Publishers’ Preface” vii)。このような強い印象が赤や褐色の海草の表現に反映されていると思われる。彼はまた、この別荘の先にあるニューイングランド海岸沖の大西洋が少年時代の想像力をかき立てたことを述懐する (“Address” 136)。こうした述懐が人魚のイメージ形成の一因となっているであろう。セントルイスの生家の近くをミシシッピ河が流れていた。子供時代のエリオットは、洪水したこの河を見に行くのが楽しみであったと述懐している (“From a Distinguished Former St. Louisan” 3B; “Letters Cites City Influence on T. S. Eliot” 8S)。そこで最終行の溺死のイメージは、パリから帰国直前のエリオットがニューイングランド海やミシシッピ河を懐かしく思い起こすことを感じさせる。それは、ブルーロックが同伴者と共に、忘れられない婦人たちのいる部屋に再び出かけた気持ちに駆られることを示唆するであろうし、詩人がエリオット家に引き寄せられることも示唆するであろう。

エリオットが帰国した後、“Portrait of a Lady” の第四部が完成される。同部の最終行は次の通りである。

And should I have the right to smile? (21)

青年は中年の婦人の死を想定して、今まで笑みを浮かべながら対応していた彼女への背信行為を振り返っている。彼は相手との付き合いを解消することができないでいる。そこから浮かび上がるのは、これからも婦人を思い出して良心の呵責に苦しめられる彼の姿であろう。息子の健康面を心配して、母親は彼を、ハーバード大学を受験させる前の 1905 年に、ボストン郊外のミルトン・アカデミー (Milton Academy) に通わせている。彼女は、同校での息子の生活を気づかう八通の手紙を校長宛に書いている (*Letters* 3-10)。パリ遊学直前の 1910 年 5 月、エリオットは 1 人の猩紅熱の擬似患者が出たため、入院させられる。それを聞いた母親は、早速、病院へ駆けつける (*Ackroyd* 40)。これらの事実からわかるように、エリオットが中年の婦人を描写していたときも、母親の存在を意識していたと言える。そうすると、この詩の最終行は、エリオットが慈愛深い母親に対する良心の呵責に悩む姿も暗示するであろう。

パリ遊学中や帰国後の詩作は、エリオットが家へ帰属せざるを得ない意識と母親に対して抱く背信行為の意識を描いている。両方に共通する人物が、同家を支配し、母親を媒介して影響を及ぼす祖父である。したがって、こうした時期のエリオットは目に見えない祖父からの重圧に苦しんでいたのである。

3

パリに滞在していたエリオットは、特に Henri Bergson (1859–1941) の哲学にも興味を抱き、彼が毎週金曜日に国立の高等教育機関コラージュ・ド・フランス (Collège de France)

で行う講義に出席する。当時のエリオットは、ベルクソンの哲学への一時的な心酔を経験し（*A Sermon* 5）、彼の著書、講義、個性から想像力をかき立てられている（introduction to *Leisure* 11）。パリから帰国した後、エリオットは草稿“Draft of a Paper on Bergson”を書き上げる。この草稿でエリオットは、“the Bergsonian space is very largely a borrowing from Berkeley” (qtd. in Habib 48) と記し、ベルクソンの空間について次のような評価を行っている。

Bergson's space is the Berkeleyan *pure* space; for Berkeley non-existence ... for Bergson it cannot be so summarily disposed of—it both exists, and not exists ... Space is, as Bradley might say, not illusion but appearance. (qtd. in Habib 48)

イギリスの哲学者 George Berkeley (1685—1753) は、「事物はすべて観念として知覚されるかぎりにおいてのみ存在を知らされる。…… 知覚されずに心の外に実在する物質世界はありえない。…… 一般に知覚される存在としての観念は、知覚される存在としての非観念的精神なくしてありえない」（『哲学事典』1093）と考える。バークリーによれば、物質をわれわれの精神の内部に移行して、観念であると信じ、知覚されずに心の外にある純粹観念（純粹空間）は非存在である。エリオットは、空間を対象とする点で、バークリーもベルクソンも似ていると判断する。とはいえ、ベルクソンは *Matter and Memory* の序文で、イメージに関して、観念論者が表象と呼ぶものよりも勝っているが、実在論者が事物と呼ぶものよりも劣っている存在なので、表象と事物の間であると解釈する（9）。そうした空間がエリオットにとって、“a middle ground between idealism and realism” (qtd. in Habib 48) と見なされるのである。その結果、ベルクソンがイメージする空間は、表象として存在するが、事物として存在しないことになる。エリオットが主張する空間観は、ベルクソンの幻想ではなくて、イギリスの哲学者ブラッドリーの仮象に基づいている。ブラッドリーの *Appearance and Reality* では、あらゆる観念に宿る真理やあらゆる実在に宿る実在を目指す所には、完全無欠な「絶対者」(the Absolute) の生命があるし、われわれの感覚による仮象と「絶対者」が不可分の関係にある（431-32）。このような彼の哲学思想が、エリオットの空間観の拠り所となっている。

ここで、エリオットがブラッドリーの「絶対者」へ依拠することに注目したい。この「絶対者」は、完全無欠であるという点で、到底太刀打ちできない偉人（“To Mary Trevelyan,” 16 Nov. 1942; *Spur* 4, 269n）として尊敬される彼の祖父を連想させる。エリオットは、本稿での詩の表現内容から察して、両親の家庭教育を介して強要される祖父の教えに従順ではなかった。そこで彼は、祖父に取って代わる存在として「絶対者」に心の支えを求めていると思われるし、「絶対者」と仮象の相関関係が自らの様々な状況に対して柔軟に対応できると判断していると思われる。

さて、“That which is given, that which is real, is something intermediate between

divided extension and pure inextension.” (*Matter and Memory* 245; Habib 49) を引用して、エリオットは次のように空間論を繰り広げる。

[Bergson] has thrown space overboard entirely ... Homogeneous space then, consequently any extrinsic relations given by analysis, will be simply the reflection of the intellect ... Homogeneous space can be only an extrinsic relation set up *inside* our intrinsic relations. (qtd. in Habib 49)

抽象的空間の広がりやを区分することにより、無限に分割が可能な延長が構成され、その構成を微細に区分して得られる広がりのない感覚により、イメージが再構成される (*Matter and Memory* 245)。ベルクソンの著書からの文章の “something intermediate” は、延長物と非延長物を取り持つ広がりである。その広がりやがベルクソンにとって実在である。延長物の感覚的性質の連続の背景に、変形可能であったり縮小可能であったりする網が考えられる。こうした観念的な図式が彼の等質空間である (*Matter and Memory* 209-10)。しかしエリオットは、この等質空間がわれわれの知性の反省による内的関係の中で築かれた外的関係であると論述している。内的関係を第一義的に見なす彼の空間論は、先の “Space is, as Bradley might say, not illusion but appearance.” が示唆するように、「絶対者」(実在)と仮象の相関関係に基づいている。

エリオットは、*Matter and Memory* の最後の第4章を最も重要なベルクソンの哲学と判断し (Habib 52)、同章からの182頁を考慮に入れた次のような文章を書き綴っている。

What is the exact different between the heterogeneous qualities which succeed each other in our concrete perception and the homogeneous changes which science sets behind these perceptions in space? The first are *discontinuous* and cannot be deduced from one another; the second on the contrary lend themselves to calculation. (qtd. in Habib 52)

ここで問題にされているのは、具体的知覚の中で継起する異質的性質と、科学がこの知覚の背後にある空間に置く等質的変化との正確な違いである。異質的性質は非連続的なので互いから得ることができないが、等質的変化は計算から得ることができる。ベルクソンは *Matter and Memory* の中でこの内容に続けて両方の性質の違いを繰り広げる。実際の具体的知覚が純粋知覚による無数の記憶力の総合であれば、感覚的性質の異質性はわれわれの記憶作用の収縮によるものであり、客観的変化の相対的等質性はこの記憶作用の自然な緊張による。その結果、この緊張が、記憶力におけるような量と、具体的知覚や科学におけるような質を仲裁するのである (182-83)。

このように、ベルクソンの哲学は具体的知覚と記憶作用に言及している。両方に欠かせな

いのが持続する運動である。エリオットは、“movement is reality itself, and immobility is always only apparent or relative.” (*Creative Evolution* 155; Habib 52) や、“it [movement] is an absolute.” (*Matter and Memory* 196; Habib 52) に注目している。彼が草稿の中で触れる *La perception du changement* (Habib 46) では、運動自体は変化であると共に実在であることが述べられている (18-37)。こうして持続する運動は、ベルクソンの場合、実在である。しかしエリオットは、この点について次のように疑問を抱くのである。

Motion is reality, is the last word of M[atter] and M[emory], but this question remains unanswered: what is motion, apart consciousness on the one hand, and from sensation on the other hand? (qtd. in Habib 53)

Matter and Memory を論じた結果、エリオットは同書の要点が “*Motion is reality*” であると締めくくっている。ベルクソンによれば、われわれの意識がわれわれから独立した空間での物体の運動を感覚的に把握し、感覚がその内容を空間に投射して物体の運動と重なり合う (*Matter and Memory* 202)。そこで動きは、意識や感覚と深く関係がある。しかしエリオットは、意識や感覚から離れた空間での動きが何であるのかが未解決であると論じている。

結局、エリオットは、“we cannot rest at the *durée* réele. It is simply not final.” (qtd. in Habib 53) と述べて、“nothing *essentially* new can ever happen; the absolute, as Bradley says, bears buds and flowers and fruit at once ... A is already so completely B, and B so completely A that there is nothing to say about either ... This is my interpretation of Bergson.” (qtd. in Habib 53) と論評する。ベルクソンのように持続を実在とすれば、AはすでにBとなり、その逆も言えるので、本質的に新しいことは何も決して起こらない。このエリオットの批評は持続そのものを執拗に否定することを強調している観がある。彼には祖父が絶えず付きまとう意識があった。そこで、持続否定の強調は、彼がどうにかして祖父の見えない影響力を回避したい心境を示唆していると言えよう。ブラッドリーの「絶対者」が芽・花・実を共に有した完全な実在として持ち出されている。彼の主眼は、ベルクソンの心の自由裁量ではなく、ブラッドリーの「絶対者」と仮象の相関関係を土台とする心の規律に向けられている。このような規律は、祖父の影響力を和らげて、自立心を養えるからである。

しかしエリオットは、人生における進路について悩んでいる。そのことが当時の詩作に表現されている。たとえば、未発表の詩 “Prufrock’s Pervigilium” (1912?) の次のような最後の詩行を引用してみたい。

I have heard my Madness chatter before day
I have seen the world roll up into a ball
The suddenly dissolve and fall away. (*Inventions of the March Hare* 44)

1910-11年の“The Love Song of J. Alfred Prufrock”の主人公は、既述のように、40歳位の男であると同時に詩人自身であった。そのことは、1912年頃の詩に登場する同じ名前の主人公にも当てはまるであろう。不眠の夜の彼は、子供たちが街角でめそめそ泣くのを聞いたり、娼婦たちが路地口に立つのを見たりする。このような光景は、パリで脱稿された1911年の“Rhapsody on a Windy Night”での娼婦や子供たちの光景を思い起こさせる。1911年の詩では、1人の男が真夜中から午前4時までの場末の荒涼とした状況を観察しながら帰宅経過を描写している。その描写は、活気のない場末の人間生活に対する彼の恐怖を表現している。上の詩行の1行目の“my Madness”は、1911年の詩と同じような主人公の恐怖を示唆するであろうし、上の詩行全体は、この恐怖を彼の狂人めいた発言で伝えているであろう。

この未発表の詩におけるブルーロックは、見たところ、狂人的な人物であるという印象を与える。この印象には、フランスへ遊学した際に注目したエリオットが偉大な心理学者と見なした Pierre Janet (1859-1947) (“A Commentary” [1934] 452) の影響が認められる。彼が住んでいた当時のボストンは、フランスで展開されていた概念（ヒステリー、心理学上の分離、二重・多重の人格）を研究していた場所であった（Gish 111）。こうした環境のもとで、彼はジャネの著書—*Néroses et idées fixes, Les obsessions et la psychasthénie*—を読んでいる（Gordon 14; Jain 170, 294n）。ジャネは、神経系の病気で特徴的な病理上の心理学を理解するため、ヒステリーを研究すべきであると主張する。彼によれば、ヒステリーは、個人的意識のうつ病の形態、個性を形成する観念・機能の体系が分離されたり解放されたりする傾向である（*The Major Symptoms of Hysteria* 332）。ヒステリー患者には、神経が衰弱し心理学的統合が低下するため、一点だけを見つめる奇妙なヴィジョンがある。このような幻覚症状の患者は、平素の人格と精神的動機に起因する別の人格を共有する。

不眠の夜を過ごすブルーロックの姿には、ジャネが考える幻覚症状の患者に似たような奇妙なヴィジョンが見られる。そこで、エリオットは、ヒステリー患者のような主人公を描きながら、人生の進路に悩む日々を解放しようとしたと言えよう。しかし、夜明けが近づくことは、そうした解放が実現できないことを暗示する。先の“The Love Song of J. Alfred Prufrock”の最後の溺死の場面は、エリオットが家族のもとに引き寄せられること、つまりその源である祖父の重圧に屈することを暗示する。1912年頃の未発表の詩は、この重圧が彼に帰国後も大きくのし掛かっていることを表現しているのである。

1913年春、エリオットはエール大学からの客員教授で観念論哲学者 Charles Montague Bakewell (1867-1957) のセミナー“Kantian Philosophy”に出席する。彼は、このセミナーのために *Three Essays on Kant* という未発表の原稿を書いている。その際、参考図書として利用されたのが、バイクエルの *Source Book in American Philosophy* である。彼はその参考図書で次のような文に注目する。

I have sought to understand myself. (Bakewell 34; Cuddy 68)

In the circumference of a circle beginning and end coincide. (Bakewell 34; Cuddy 97)

最初の文が彼の目を引き付けたのは、これからの人生の進路について苦悩する自分の姿を言い当てているからであろう。彼は、修士課程修了後にハーバードを離れ、再びハーバードに戻るという一種の円環の状況を体験する。その後、彼は博士課程に進学して研究を始める。それは同時に、両親の庇護のもとで祖父の威圧を感じることもである。そのため彼は、母国でその重圧を何とかして終わらせたいという願いを抱いたと思われる。二番目の文は彼に、そうした自分の置かれている立場を気づかせたのであると思われる。

1914年、エリオットはハーバードからシェルドン在外研究奨学金 (Sheldon Traveling Fellowship) をもらい、再びハーバードを離れる。その目的は、ブラッドリーの弟子であるイギリスの観念論哲学者 Harold Joachim (1868–1938) の指導のもとでブラッドリーの哲学を勉強するためである。その行動は、現実を回避するための海外留学である (Ackryod 54)。その背景には、祖父の見えない威圧を振り払いたい思いがあることも軽視できないであろう。その態度を後押ししたのが彼の哲学の勉強であると思われる。具体的な時期は判明できないが、学生時代の彼は、イギリスの哲学者 David Hume (1711–76) の *Enquiries Concerning the Human Understanding and Concerning the Principles of Morals* の次のような文に、印を付けたらあるいは下線を施したりしている。

Why has the will an influence over the tongue and fingers, not over the heart or liver? This question would never embarrass us, were we conscious of a power in the former, not in the latter. (65; passage marked by Eliot in the margin; Cuddy 75)

But consciousness never deceives us. Consequently, neither in the one case nor in the other, are we ever conscious of any power. We learn the influence of our will from experience alone. (66; Eliot's underling; Cuddy 75)

The command of the mind over the itself is limited, as well as its command over the body; and these limits are not known by reason (68; Eliot's underling; Cuddy 76)

舌や指は、彼が自分の思いを自問自答したり書いたりするのに必要な器官であったと思われる。これらの器官に及ぼす意志の影響力が注目される。その影響力を意識する必要がある。この意識状態のもとで意志の影響力を学ぶのは経験からである。精神の自制は理性から得られない。

ここでエリオットと上に引用された文とのかかわりから読み取れるのは、彼が理性による認識よりも経験を重視することである。祖父の存在を絶えず認識していた彼は、その認識を振り払うために経験を重んじることを学んだと言えよう。このことが、既述した理由で彼が

海外留学する意志を哲学の勉学の面から支えたのでありと考えられる。

エリオットは、イギリスのオックスフォード大学で哲学を研究する前、ドイツの都市マールブルク (Marburg) に滞在して夏期講座を受けるつもりでいた。彼はこの滞在先から、エイケンに手紙を送り、旅の疲れをとるため、のんびりと過ごしていることを報告している (25 July 1914, *Letters*, 49-50)。その手紙には、未発表の詩 “Oh little voices of the throats of men” が同封され、次のような詩行が書かれている。

Appearances, appearances, he said,
And nowise real; unreal, and yet true;
Untrue, yet real;—of what are you afraid?
Hopeful of what? ...

No other time but now, no other place than here, he said. (*Letters* 50; *Inventions* 75)

彼は、所有する *The Philosophy of Kant* の文章 “For the truth is, that however far we may carry our investigations into the world of sense, we never can come into contact with aught but appearances” (37) に、1913年3月3日の日付を記入している (*Inventions* 259n)。彼はまた、同年6月にブラッドリーの *Appearances and Reality* を購入し (Ackroyd 48)、その後この哲学者が著した本を熱心に読んでいる (Smith 94)。これらの事実から察して、上の詩行の “Appearances” (“appearances”) はブラッドリーの哲学概念を指しているであろうし、“he” はブラッドリーを指している (Mayer 142) であろう。“Oh little voices of the throats of men” をエリオットの人生の自問の詩と解釈すれば、語り手は詩人であると言えるし、“you” は詩人自身の内面の自己であると言える。

ブラッドリーにとって、あらゆる観念に宿る真理やあらゆる存在に宿る実在が目指す所には「絶対者」の生命があったし、われわれの感覚による仮象と実在とは密接な関係にあった。それらのことを学んでいたエリオットは、こうした仮象の性質を “nowise real; unreal, and yet true; / Untrue, yet real” として表現しているであろう。また、“of what are you afraid? / Hopeful of what?” は、彼が人生の選択について自問していることを示唆しているであろう。彼がこの自問から下した結論は、今いる所でその選択を決断することである。

4

ところが第一次世界大戦 (1914—18) の勃発のため、エリオットは公開講座を受けることなく急遽マールブルクを去り、1914年8月にロンドンに到着して、10月にオックスフォード大学マートン・カレッジ (Merton College) に籍を置く。彼は、エイケンの紹介により、ロンドンを拠点にして現代と過去を併置して文学の改革を推進していたパウンドのアパートを訪問する。彼はアメリカにいたとき、この文学改革推進者に特別な感情を持っていなかった (Plimpton 98)、訪問した当初も同じような感情を抱いていた (“To Conrad Aiken,” 30

Sept. 1914, *Letters* 63)。

パウンドの方は、会ったときからエリオットの詩の才能を見抜き、通信員をしていたシカゴの雑誌 *Poetry* の主宰者で女流詩人・批評家 Harriet Monroe (1860-1936) に彼の詩を高く評価する手紙を書き綴る (30 Sept. 1914, *The Letters of Ezra Pound* 80; Oct. 1914, *Letters* 81)。その結果として、彼女の雑誌の 1915 年 6 月に “The Love Song of J. Alfred Prufrock” が発表され、彼女の雑誌の同年 10 月に 1915 年作の 3 つの詩 (“The Boston Evening Transcript”, “Aunt Helen”, “Cousin Nancy”) が “Three Poems” という表題で発表される。また、パウンドの尽力で、文学改革の運動の仲間である Wyndham Lewis (1884-1957) が主宰する *Blast* の 1915 年 7 月に “Preludes” と “Rhapsody on a Windy Night” を収めた “Poems” が掲載される。このようなパウンドの文学に対する並々ならぬ情熱を目撃して、エリオットはロンドンで詩作を再開する決意をする (“Ezra Pound” 327)。その決意が、二通の手紙 (“To Mrs. Jack Gardner,” 10 July? 1915, *Letters* 116; “To L. B. R. Briggs,” 10 July 1915, *Letters* 118) からもうかがわれる。

イギリスでのエリオットの人生に目を向けると、第一次世界大戦中の重苦しい時世のもとで、彼はイギリスに住むべきかハーバードに帰るべきかなどについて悩んでいる (“To Conrad Aiken,” 25 Feb. 1915, *Letters* 95-96)。そうした不安定な精神状態の彼の心をとらえたのが、1915 年 6 月 26 日に電撃結婚することになるイギリス人のヴィヴィアンである。彼女が U ボートの攻撃による身の危険を告げたので (Ackroyd 65)、同年 7 月下旬に彼は、単身で帰国して両親に近況を報告する。彼は、知らせを受けた両親から博士論だけは完成するようにという嘆願を受け入れて、約 1 ヶ月後にイギリスへ戻る。翌年 4 月に博士論文 “Experience and the Object of Knowledge in the Philosophy of F. H. Bradley” が書き上げられ、母校のハーバード大学に郵送される。しかし彼は、口述試験に出席しなかったため、学位を取得することができなかった。当時の彼は「絶対者」への不信と哲学研究の放棄をすでに決断していたのである (“To Norbert Wiener,” 6 Jan. 1915, *Letters* 88)。このような彼の決断に大きく関与していたのが、文学への関心を改めて開眼させたパウンドの存在と、将来の人生設計を支える新妻の存在であると言えよう。したがって、彼の学位請求論文は両親への義務感による脱稿であった (Brooker 8)。

エリオットは祖父の代わりの対象として「絶対者」を信奉することにより、前者の重圧を少しでも軽減しようとした。しかし、パウンドとヴィヴィアンの影響を受けて「絶対者」に全幅の信頼を置かなくなった。そこで、学位請求論文の記述内容を参考にして、彼がこの哲学概念についてどのように対処しようとしたのかを論考したい。この学位請求論文は、*Knowledge and Experience in the Philosophy of F. H. Bradley* として改題されて、1964 年に出版されている。1964 年の出版本の最後の文章で「絶対者」に触れている。ここでは、その文章に注意を払ってみよう。

The Absolute, we find, does not fall within any of the classes of objects: it is neither

real nor unreal nor imaginary. But I do not think that supersubtle defence is necessary. A metaphysic may be accepted or rejected without our assuming that from the practical point of view it is either true or false. The point is that the world of practical verification has no definite frontiers, and that it is the business of philosophy to keep the frontiers open. If I have insisted on the practical (pragmatic?) in the constitution and meaning of objects, it is because the practical is a practical metaphysics. It is because the practical is a practical metaphysics. And this emphasis upon practice—upon the relativity and the instrumentality of knowledge—is what impels us toward the Absolute. (169)

ブラッドリーの「絶対者」を否定的に表現する記述自体がこの完成態に対するエリオットの懐疑的な姿勢が読み取れるであろう。形而上学の真偽について実践的な視点が導入されて、哲学の任務が固定されない柔軟な思考に基づくべきであると力説されている。ブラッドリーの哲学では、「絶対者」と仮象の不可分の関係が述べられていた。そうした認識による実践そのものに目を向けて、対象間の相対性や程度・度合だけがことさら主張されている。これらの主張が、「絶対者」への不信と哲学研究の放棄を間接的に示唆しているように思われる。

エリオットは、絶えず威圧を感じる祖父に取って代わる対象として、ブラッドリーの「絶対者」を考えていた。それは、心の平静を得て、自分の人生の道筋を決めたいからである。彼の決断の手助けとなったのが、学生時代にヒュームの経験重視を知ったことである。この経験重視の考えが上の文章に見られる実践の強調に反映されていると言える。学位請求論文を執筆中に、彼にとって重大な経験があった。それが、パウンドやヴィヴィアンとの出会いであった。その出会いが一因となって人生に転機が訪れ、エリオットはイギリスに留まって詩作に専念することになる。そのことが、祖父の重圧からの逃れようとする彼の新たな人生の選択でもあったと言えよう。

おわりに

1910—15年におけるエリオットの学生時代の人生を考えると、軽視できないのがエリオット家の支柱であった祖父の存在とブラッドリーの中心的な哲学概念「絶対者」である。

家庭で両親による祖父の偉大な生涯を教えられたことにより、容易に消すことのできない偉人の威圧感がエリオットに襲い掛かっていた。人生の活路を見出すため、彼は二度の現実逃避を試みる。その際の希望の光とでもいべき対象として、彼は哲学研究で学んだ「絶対者」を選択する。この哲学概念は仮象と相対的な関係で結ばれる。この仕組みは、実は、祖父とエリオットの人生との関係にも当てはまる。彼は、「絶対者」を信奉することにより祖父の重圧を取り除こうとしたが、この重圧が依然として彼の行く先々に付いて回るのである。そこで彼は、同じ哲学研究で知った実践的な経験を生かして、パウンドの影響により文学に専念し、ヴィヴィアンの影響により新たに生きる力を求めることになる。

以上の考察から、祖父と「絶対者」を強く意識しながら、エリオットは勉学と人生に向かい合っていた。したがって、このような点に注目して論を進めたことは、1910-15年における彼の人生の一面を理解する際に有益である。

注

1. この派については、次のような解説を参照。
「三位一体論を否定、単一人格の神を主張し、イエス・キリストの神性を認めず、その贖罪を無意味とし、聖霊を神の現存とする教派。人類愛を唱えた社会的な改革にも関心が強い。」(『岩波キリスト教辞典』1144)
2. 公表されている現行の詩からの引用はすべて *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot* による。括弧内の数字はこの作品全集の頁を表す。
3. この点については、拙稿「T. S. エリオットの初期の詩と母親」を参照。

引用文献

- Ackroyd, Peter. *T. S. Eliot: A Life*. New York: Simon and Schuster, 1984.
- Bakewell, Charles M. *Source Book in Ancient Philosophy*. New York: Charles Scribner's Sons, 1907.
- Bergson, Henri. *La perception du changement: conférences faites a l'Université d'Oxford les 26 et 27 mai 1911*. Oxford: Clarendon P, 1911.
- . *Creative Evolution*. Trans. Arthur Mitchell. New York: H. Holt, 1911. London: Macmillan, 1911. New York: U of America, 1983.
- . *Matter and Memory*. Trans. Nancy Margaret Paul and W. Scott Palmer. London: George Allen and Unwin, 1911. 1988. New York: Zone Books, 1991.
- Bradley, F. H. *Appearance and Reality: A Metaphysical Essay*. 1893. Oxford: Clarendon P, 1966.
- Brooker, Jewel Spears. "Enlarging Immediate Experience: Bradley and Dante in Eliot's Aesthetic." *T. S. Eliot, Dante, and the Idea of Europe*. Ed. Paul Douglass. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing, 2011. 3-13.
- Childs, Marquis W. "From a Distinguished Former St. Louisan." *St. Louis Post-Dispatch* 83.89 (15. Oct. 1930) : 3B.
- . "Letter Cites City Influence on T. S. Eliot." *St. Louis Post-Dispatch* 86.46 (16. Feb. 1964) : 2S, 8S.
- David Hume. *Enquiries Concerning the Human Understanding and Concerning the Principles of Morals*. 1902. Ed. L. A. Selby-Bigge. Oxford: Clarendon P, 1927.

- Drew, Elizabeth. *T. S. Eliot: The Design of His Poetry*. New York: Charles Scribner's Sons, 1949.
- Eliot, Charlotte Champe. *William Greenleaf Eliot: Minister, Educator, Philanthropist*. Boston: Houghton Mifflin, 1904.
- Eliot, T. S. *Three Essays on Kant*. 1913. John Hayward Bequest of T. S. Eliot's Library Manuscripts. King's College Library, Cambridge.
- . "The Love Song of J. Alfred Prufrock." *Poetry* 6.3 (June 1915) : 130-35.
- . "Poems." *Blast* 2 (July 1915) : 48-51.
- . "Three Poems." *Poetry* 7.1 (Oct. 1915) : 21-22.
- . "The Perfect Critic." 1920. *The Sacred Wood: Essays on Poetry and Criticism*. 1920. London : Methuen, 1928. 1-16.
- . "The Publishers' Preface." *Fishermen of the Banks*. By James B. Connolly. London : Faber and Gwyer, 1928. vii-viii.
- . "[A review of] *Son of Women: The Story of D. H. Lawrence*. By John Middleton Murry." *Criterion* 10.41 (July 1931) : 768-74.
- . "A Commentary." *Criterion* 12.48 (Apr. 1933) : 468-73.
- . "A Commentary." *Criterion* 13.52 (Apr. 1934) : 451-55.
- . "What France Means to You." *La France libre* 8.44 (15 June 1944) : 94-99.
- . "T. S. Eliot." *Irving Babbitt: Man and Teacher*. Ed. Frederick Manchester. New York: G. P. Putnam's Sons, 1941. 101-04.
- . "Ezra Pound." *Poetry* 68.6 (Sept. 1946) : 326-38.
- . *A Sermon, Preached in Magdalene College Chapel*. Cambridge: Cambridge UP, 1948.
- . Introduction. *Leisure, the Basis of Culture*. By Josef Pieper. Trans. Alexander Dru. London: Faber and Faber, 1952. 11-17.
- . "American Literature and the American Language." 1953. *To Criticize the Critic and Other Writings*. London : Faber and Faber, 1963. 43-60.
- . "Address." *From Mary to You* (Centennial Issue [Dec.] 1959) : 133-36.
- . "T. S. Eliot ... An Interview." *Grantite Review* 24.3 (1962) : 16-20.
- . *Knowledge and Experience in the Philosophy of F. H. Bradley*. London: Faber and Faber, 1964.
- . *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*. London: Faber and Faber, 1969.
- . *The Letters of T. S. Eliot, Vol. 1: 1898-1922*. 1988. Ed. Valerie Eliot and Hugh Haughton. London: Faber and Faber, 2009. 3 vols. 2009-12.
- . "Prufrock's Pervigilium." *Inventions of the March Hare, Poems 1909-1917*. Ed. Christopher Ricks. London : Faber and Faber, 1996. 43-44.

- Eliot, William Greenleaf. *Lectures to Young Men*. Boston: American Unitarian Association, 1882.
- . *Discourses on the Doctrines of Christianity*. Boston: American Unitarian Association, 1886.
- Gish, Nancy K. "Discarnate Desire: T. S. Eliot and the Poetics of Dissociation." *Gender, Desire, and Sexuality in T. S. Eliot*. Ed. Cassandra Laity and Nancy K. Gish. 2004. Cambridge: Cambridge UP, 2007. 107-29.
- Gordon, Lyndall. *Eliot's Early Years*. New York: Oxford UP, 1977.
- Green, Edward J. H. *T. S. Eliot et la France*. Paris: Boivin, 1951.
- Habib, M. A. R. *The Early T. S. Eliot and Western Philosophy*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- Holt, Earl K. III. *William Greenleaf Eliot: Conservative Radical*. St. Louis: First Unitarian Church, 1983.
- Jain, Manju. *T. S. Eliot and American Philosophy: The Harvard Years*. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
- Janet, Pierre. *Névroses et idées fixes*. Paris: F. Alcon, 1898. 2 vols. 1898.
- . Vol. 1 of *Les obsessions et la psychasthénie*. 1903. New York: Arno P, 1976. Psychology, 1750-1920. Series C: Vol. 2. 1867-1901. Series A-E. 1768-1906.
- . *The Major Symptoms of Hysteria: Fifteen Lectures Given in the Medical School of Harvard University*. Macmillan, 1907.
- Janet, Pierre and F. Raymond. Vol. 2 of *Les obsessions et la psychasthénie*. 1903. New York: Arno P, 1976.
- Laforgue, Jules. "Autre complete Lord Pierrot." *Poésies complètes*. Ed. de Pascal Pia. Paris: Le Livre de Poche, 1970. 85.
- Mayer, John T. *T. S. Eliot's Silent Voice*. Oxford: Oxford UP, 1989.
- Miller, James E. Jr. *T. S. Eliot: The Making of the American Poet, 1888-1922*. U Park, Pa: Pennsylvania State UP, 2005.
- Plimpton, George, ed. "T. S. Eliot." *Writers at Work: The Paris Review Interviews*. 2nd Series. 1977. New York: Viking P, 1963. London: Secker and Warburg, 1963. Harmondsworth: Penguin Books, 1979. 8 serieis. 1958-88. 91-110.
- Pound, Ezra. *The Letters of Ezra Pound, 1907-1941*. Ed. D. D. Paige. London: Faber and Faber, 1951.
- Power, Sister Mary James. *Poets at Prayer*. New York and London: Sheed and Ward, 1938. New York: Freeport, 1968.
- Spurr, Barry. 'Anglo-Catholic in Religion': *T. S. Eliot and Christianity*. Cambridge: Lutterworth P, 2010.

- Symons, Arthur. *The Symbolist Movement in Literature*. 1899. New York: E. P. Dutton, 1958.
- Tinckom-Fernandez, W. G. "T. S. Eliot, '10, An Advocate Friendship." *Harvard Advocate Centennial Anthology*. Ed. Jonatahn D. Culler. Cambridge, Mass: Schenkman Publishing, 1966. 74-81.
- Watson, John. trans. *The Philosophy of Kant: As Contained in Extracts from His Own Writings*. Glasgow: James Maclehose, 1908.
- 大貫隆・名取四郎・宮本久雄・百瀬文晃編。『岩波キリスト教辞典』。東京：岩波書店，2002。
- 古賀元章。「T. S. エリオットの初期の詩と母親」『Comparatio』9 (2005) : v-xxi.
- 林達夫他監修。『哲学事典』。1971。東京：平凡社，1993。